

過去の災害に学ぶ

四年前、内閣府に「災害教訓の継承に関する専門調査会」が設置されました。過去に日本で発生した百の自然災害を十年かけて調査し、そこから現在に生かせる教訓を導き出すという計画です。取り上げられた災害は、地震、噴火、津波、台風、集中豪雨、洪水、土砂、大火、気象による海難などさまざまで、我が国の歴史を調べれば、これらの災害に見舞われない年はないはずです。

長崎県については、三年前の「一九八二長崎豪雨災害報告書」に続き「一九九〇雲仙普賢岳噴火報告書」が近日中に完成します。火山都市国際会議では、この報告書を基にフォーラムが開催され、島原の情報が世界に発信されます。

生かされた災害の教訓

北海道の有珠山は、二、三十年に一度、噴火を繰り返しています。一九七七年の噴火終息後、地元ではいつしか災害のことを語らなくなっていました。ところが一九九一年、雲仙・普賢岳噴火災害が起こります。「火砕流ってあんなに危険なのだ！」と住民や観光業者の火山に対する意識は大きく変わりました。地元町長は「次に備え勉強を始めよう」と住

松島健博士と行く

世界の火山めぐり

(八)ロシアの活火山

ロシアはヨーロッパ・アジアにまたがる大国ですが、活火山は極東地域のさらに東端のカムチャツカ半島と、千島列島にしかありません。しかし、その数は一五〇を超え、毎年のようにいくつかの火山が噴火を繰り返しています。

州都のペトロパブロフスク・カムチャツキーはアバチンスキー火山の裾野にあり、もし大規模な噴火が起これば大きな被害を受ける可能性があります。さまざまな観測研究が行われ、ハザードマップの作成などの対策が検討されています。

カムチャツカの火山は、ユネスコの世界遺産に登録されています。火山灰や溶岩でつくられた山体を氷河が削り、溶岩の黒と、白い氷雪、そして深い緑に彩られた火山は、カムチャツカを象徴する風景です。

ところで、これらの活火山の多くは無人の地域にあるため、人間に直接被害を及ぼすことはほとんどありません。しかし、半島の東方沖はアジアと北米を結ぶ重要な航空路となっています。少し大きい噴火が発生すると、火山灰は上空一万メートルの高さにも舞い上がり航空機を襲いま

す。火山灰が高温のジェットエンジンに吸い込まれると、火山灰がエンジン内にこびりつき、最悪の場合、エンジンが停止するなど大変危険です。

火山都市国際会議では、火山噴火と航空機の安全性についての議論も予定されています。

(執筆：松島健九州大学地震火山観測研究センター准教授・理学博士)



↑ペトロパブロフスク空港とアバチンスキー火山